

ピースフェア 2021 を開いて

ちば・戦争体験を伝える会 市川まり子

新型コロナウイルスのまん延防止等重点措置が延長される中、6月9日～13日、千葉市きぼーるアトリウムで、「千葉市平和のための戦争展 ピースフェア 2021in千葉」を開催しました。昨年は会場での開催を取りやめ、ちば・戦争体験を伝える会のホームページ上で開きましたが、二度と戦争を繰り返させないために、戦争の悲惨な実態を戦争を知らない世代の人たちに伝えたい—その思いは、体験者が直接語る限界が近づき、「敵基地攻撃能力」などが取りざたされる中募るばかりで、会場での開催を決めました。入口を限定し、来場者名簿記入をお願いしたところ、記入者は463名でした。

今回、毎日「千葉市空襲犠牲者」の読み上げを行いました。2015年に亥鼻公園に建立した「平和祈念碑」に刻んだ721件（家族等複数表記あり）と新たに判明した4名を追加した725件の読み上げには、新聞報道を見て駆けつけた方も参加し、お名前を読み上げることで、奪われた一人一人の命について思いを寄せることが出来ました。毎回続けて行われた石垣りんさんの詩「弔辞」の朗読は胸に染みわたりました。

ステージ上は2名までとし、平日は読み上げと詩の朗読・紙芝居だけでしたが、土日には常連の皆様の素晴らしいステージがあり、12日午後には、腹話術・読み上げ・紙芝居・体験談・詩の朗読と、「密」を避けつつ「戦争を繰り返さないための集い」を開くことができました。これまでのステージはDVDで上映させていただきました。

今回の展示企画テーマは「戦争孤児と戦後 東京空襲・沖縄戦・他」としました。おびただしい悲惨な死をもたらしたアジア太平洋戦争が終わった後、生き残った人々、中でも「戦争孤児」にとっての戦後は、それは過酷なものでした。「もしも魔法が使えるなら 戦争孤児11人の記録」を出版された星野光世さんの体験と神戸空襲被災者の山田清一郎さんの体験をご紹介します。自分たちが食べていくだけで精一杯だった時、親を失った子どもたちがどんな扱いを受けたか、盗んで食べるしかなかった子どもたちは、どうやって生き抜いてきたのか、優しい絵から痛烈な告発の聲が聞こえてきました。

また、沖縄の夜間中学「珊瑚舎スコーレ」で学ぶおばあ・おじいからの聞き書きをまとめた『まちかんでい！動き始めた学びの時計』から、特に戦争孤児の体験をご紹介します。『戦争孤児たちの戦後史1』(吉川弘文館)に執筆された川満彰かわみつあきらさんの「沖縄の戦争孤児」についての講演録とお父さまけいせい恵清さんのお話、集団自決(強制集団死)が行われた「慶良間諸島の戦争」についての取材記、座間味島の現場にいた「上里和子さんの戦争体験の紙芝居」「沖縄戦の写真」と、悲惨な戦争の実相を伝える展示でした。

会場ですぐ目に入ったのが、本町小学校と千葉朝鮮初中級学校の子どもの絵やお習字、「憲法ははじめの一步・シール投票」と、「ピースフェア」を明るく照らし出してくれました。パネル展示は、間隔を空けて風通しを良くするため、参加を千葉市を中心に活動されている団体に限らせていただきましたが、日頃の皆様のさまざまな活動に頼もしさを実感しました。新型コロナウイルスは、この社会の問題点や弱点をさらけ出し、改正国民投票法も成立しました。ここから私たちは何処へ向かうのか、私たちが選んでいく、そのヒントになればと思っています。皆様のご協力に感謝します。